

平成22年5月20日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530694
研究課題名（和文）近代日本における中学校と高等女学校の比較研究：中等教育におけるジェンダーの構築
研究課題名（英文）A Comparative Study of Middle Schools and Girls' Middle Schools in Modern Japan: The Construction of Gender in Secondary Education
研究代表者
小山 静子（KOYAMA SHIZUKO）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：40225595

研究成果の概要（和文）：中学校や高等女学校への進学率が、1920年代で10%程度であったことからわかるように、中学校や高等女学校に通うということは、経済的にも文化的にも恵まれた階層に所属していることを示していた。そしてそのことは、学校卒業後の進路、さらには結婚後の役割が男女で大きく異なっており、男子は社会的地位を獲得して一家の長として妻子を扶養し、女子は主婦として家事・育児を担っていくことを意味していた。このような性別による役割期待の相違を考えるならば、中等教育機関における教育内容や生徒たちが親しむ文化が性別によって異なることは、当然予想できる。しかし実際に研究を行ってみると、当初予想していた以上に、多様なジェンダーによる教育の相違が明らかとなった。すなわち、中学校や高等女学校の教科書の内容や教育雑誌などに掲載された記事を分析すれば、中学校と高等女学校におけるカリキュラム上の違いを超えて、具体的な教育内容や各教科の意味づけの相違が存在していた。また、中学生や高等女学生が愛読した少年雑誌や少女雑誌からは、「少年らしさ」や「少女らしさ」の内実や友情に対するとらえ方の違いが見て取れた。これらの知見はこれまでの研究において十分に解明されてこなかった点であり、このような中等教育におけるジェンダーのありようを具体的に明らかにしえたことが、本研究の意義であるといえる。

研究成果の概要（英文）：As the ratio of students who went on to middle schools and girls' middle schools was around 10% in the 1920s, it suggested that students who attended these schools belonged to economically and culturally privileged strata of society. It meant that their paths after graduation, and further more, roles after marriage differed between man and woman; man would attain social position and support his family as a head of the family while woman undertake housework and childcare. Considering these gender differences in role expectations, it was reasonably expected that educational contents and the culture students come to contact with in secondary education differed by gender. This study, however, further reveals more various gender differences in education than it had originally been expected. That is, through the analyses of the contents of middle schools and girls' middle schools textbooks and the articles on educational magazines, this study reveals differences in specific educational contents and the meaning of each subject beyond curricular differences between the two schools. Likewise, the analyses of boys' and girls' magazines the students of each school read reveal the implications of "boyishness" and "girlishness," and differences in the perceptions of friendship. These findings have not been fully examined in previous studies; therefore, the significance of this study is that it specifically reveals these realities of gender in secondary education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：中学校、高等女学校、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

これまで、戦前日本の中等教育に関する研究は数多く存在し、教育制度史や教育政策史を中心に研究が蓄積されてきた。しかし、中学校の研究者と高等女学校の研究者とは、それぞれの問題関心が異なっていることもあり、研究の交流を相互に行うということがあまりないのが現状である。その結果、中学校と高等女学校とを比較しながらその相違を検討する、あるいは戦前の中等教育を総合的に把握するという試みはほとんど行われてこなかった。

また日本教育史において、ジェンダー概念を用いた研究の必要性が語られるようになったのは、1990年代に入ってからであり、他の研究領域に比べると研究の蓄積は未だ乏しいといわざるをえない状況にある。そしてジェンダーという言葉を用いた教育史研究であっても、単なる「女性」や「男女の関係」の言い換えである場合も多く、教育という領域において、性差に基づく非対称な権力関係の構造がいかにして形成されたのかを問う研究はあまりない。

このような日本教育史研究の状況に鑑み、本研究では、中学校と高等女学校とを同時に研究対象として取りあげ、近代日本の中等教育におけるジェンダー秩序の解明をめざしたいと考えた。

2. 研究の目的

戦前の日本においては、男女別学体制が貫徹し、教育理念においても、教育内容においても、「男子向きの教育」と「女子向きの教育」とが明確に存在していた。そこで本研究では、戦前の日本における中等普通教育機関である中学校と高等女学校に焦点を当て、両

者を比較研究する中から、ジェンダーによる教育の差異がどのようなものとして構築されていたのか、そこにはどのようなジェンダーの階層性が存在するのか、明らかにしていきたいと思う。

そしてこのことは、従来の教育史研究がとってきた、「一般的・普遍的な」教育史に対して、女子教育史を対置する、すなわち、男子という存在には視点を向けずに、女子という存在に焦点を当てて女子固有の問題のみを考察の対象とする、という認識枠組みの相対化をめざすものでもある。女子教育だけを取りあげるのではなく、ジェンダー概念を用いて、男女の教育を同じ俎上にあげて考察していくという、新たな認識枠組みで教育事象を分析していく必要性を提起していきたいと考える。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者1人による研究であるが、実際には6名の研究協力者の協力を得て行った研究である。というのは、中学校と高等女学校の比較研究をより広範な視点から行うためには、7人がそれぞれに研究テーマを設けて研究を進めることが重要であり、そのことを通して、多面的にジェンダーによる相違を解明することができると考えたからである。具体的には以下の2つのグループに分かれ、言説分析という手法をとりながら、研究を進めていった。また研究会を重ねることで、各人の研究成果をお互いに共有し、共同研究としての問題関心の確認や視点の共有を図った。

(1)中学校と高等女学校の教育内容の比較研究

同じ中等普通教育機関でありながら、性別によってどのような教育内容の相違が存在していたのかを明らかにするために、中学校や高等女学校で使用された修身教科書や生理衛生教科書を分析した。これらの作業を通して、期待される男性像や女性像がいかに異なっていたのか、性差の記述がいかに行われていたのか、検討した。

また教育雑誌や新聞などに掲載された記事を用いながら、中学校や高等女学校でどのような音楽教育やスポーツが行われていたのか、音楽やスポーツに対して、性別によってどのように異なる意味づけが行われていたのかを考察した。

(2)少年文化と少女文化の比較研究

中学生や高等女学生が形成した少年文化や少女文化がどのようなものであったのかを明らかにするために、中学生や高等女学生が読んだ雑誌である、実業之日本社から発行されていた『日本少年』と『少女の友』を検討した。そのことを通して、少年・少女にとっての文芸や、男女における「友情」の意味の相違を考察した。

4. 研究成果

3年間の研究を通して明らかになったことは以下の通りである。

(1)修身教科書においては、同じ執筆者であっても、中学校では男女の同等性や相互の貞操を強調する嫌いがあるのに対して、高等女学校では女子の貞操、夫唱婦随や内助、夫に対する礼儀を強調するなどの相違があったこと。

(2)生理衛生教科書では、同じ執筆者でありながら、中学校では人種による相違を、高等女学校では性別による相違を強調するという違いが存在していたこと。

(3)スポーツに関していえば、「男子向きのスポーツ」と「女子向きのスポーツ」というとらえ方が明確に存在しており、「野球＝男性的、テニス＝女性的」と認識されていた。また、男子は「運動好き」、女子は「運動嫌い」といった、スポーツに対する親和性にも、性別による差があると考えられていた。これらのことに端的に示されるように、スポーツ観にはジェンダーによる相違が明瞭に認められ、スポーツと男らしさが結びついていたこと。

(4)音楽に関しては、高等女学校と中学校における音楽教育の位置づけや音楽教育に対する意味づけの相違がはっきりと存在し、高等女学校の方が明らかに音楽教育に親和的

であったこと。

(5)文芸の領域にも「少年らしさ」と「少女らしさ」が存在していた。少年はエリートの証として、大人びた文章を書けることが必要とされながら、他方では少年らしさの発露も求められるなど、矛盾の中にいたこと。それに対して、少女は少女らしさだけが求められており、少年のような葛藤が存在しなかったこと。

(6)男の友情とは、「兵士として、労働力としての友情」や「戦友意識」といったものに直結していたが、それに対して、女の友情は、「日本の少女」という表象が見られるものの、男子ほどには国家への忠誠を語るものではなかったこと。

このように、中学校や高等女学校における教育内容や少年像・少女像は、実にさまざまな領域において異なっていたことがわかる。(1)や(2)からは、高等女学校の方が性別というものに対してより敏感であったことが見てとれるし、(3)や(4)からは、スポーツ＝男子、音楽＝女子、という対比が存在していたことが推測できる。また(5)や(6)からは、高等女学生に比べると、中学生の方がより「大人」や国家と結びついていたといえるだろう。これらの違いは、もちろん単なる現象として理解されるべきものではなく、これらの事象の背後には、期待される性別役割や性規範の相違というものが存在していた。だからこそ、このような中等教育におけるジェンダーの相違が生まれたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①小山静子、日本教育史の研究動向(近現代)、日本の教育史学、51集、2008、pp.125-133(査読なし)

〔図書〕(計5件)

①小山静子、他、思文閣出版、**知の伝達メディアの歴史研究**、2010、304

②小山静子、**勤草書房、戦後教育のジェンダー秩序**、2009、251

③小山静子、他、昭和堂、**女性と高等教育**、2008、339

④小山静子、他、藤原書店、**「育つ・学ぶ」の社会史**、2008、299

⑤小山静子、他、放送大学教育振興会、**教育の社会史**、2008、257

6. 研究組織

(1)研究代表者

小山 静子 (KOYAMA SHIZUKO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：40225595

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：